

## 認知症高齢者と穏やかに関わる上での「演技」することの必要性

穂山 朋実

杏林大学保健学部健康福祉学科4年

### 【はじめに】

実際の認知症高齢者のケアにおいては困難を感じる場面が多々ある。例えば、認知症の特徴として記憶障害があるが、つい先程説明したことでもすぐに忘れ、同じことを聞きに来るといったことはよくあることであり、援助者がストレスを感じる要因ともなっている<sup>1)</sup>。認知症高齢者への対応を援助者側で全て一致させることは困難だが、援助者によって対応が違いすぎると認知症高齢者は混乱をきたす。

上記の現状を鑑み、本研究では、施設での日常生活援助の中で行われている認知症高齢者の、場にそぐわない言動に同意する援助方法、つまり一種の「ウソ」を援助には必要な技術として考え、安心して穏やかに過ごすための一種の「演技」と捉えることとし、その必要性について論じた。

### 【方法】

本論文を作成するにあたり、論文検索サイトCiNiiで論文収集を行った。検索キーワードを「認知症高齢者 演技」としたが、認知症高齢者本人に対しての演技の研究は見当たらなかった（認知症高齢者の理解を目的とした学校教育への役割演技やロールプレイングの導入についての研究は2件存在したが、本研究との関連性は薄いと判断した）。

そのため本研究では、長年医師として認知症高齢者を診察し、自身も認知症高齢者に関わってきた杉山孝博の著書を参考にした<sup>2)</sup>。杉山は認知症介護の基本原則を「認知症をよく理解するための9大法則・1原則」としてまとめて

おり、本研究ではその内の（「演技」に関係する）1法則に焦点を当てた。

事例は筆者自身の体験及び映像資料を用い、検討の際は本人が特定されないよう匿名化した。

### 【結果と考察】

検討した事例から、特に認知症高齢者が帰宅願望や帰宅要求を示した時に、本人に合った「演技」を取り入れることがわかった。記憶は逆行性喪失といって「蓄積されたこれまでの記憶が現在から過去にさかのぼって失われていく<sup>3)</sup>」ため、認知症高齢者は昔のことをよく覚えている傾向にある。たとえ現在の状況に当てはまらなくても時代や本人の生活歴を遡れば理解できる場合が有り得るため、認知症高齢者と関わる際には過去とともに現在を生きていることを認識し、本人の世界に合わせて「演技」をしながら支援することが必要であるといえよう。

### 【参考資料】

- 1) 松田千登勢・長畑多代・上野昌江・郷良淳子「認知症高齢者をケアする看護師の感情」『大阪府立大学看護学部紀要』12巻1号, pp. 85-91, 2006年
- 2) 杉山孝博『改訂認知症の理解と介護——認知症の人の世界を理解しよい介護をするために——』公益社団法人認知症の人と家族の会神奈川県支部
- 3) 同上